



PROFILE

こだま かずのり
児玉 和範さん(72歳)

弥富市神戸

皆でコロナ禍を 乗り越えたい

児玉さんは十四山水耕ミツバ組合に所属し、353坪のハウスでミツバを栽培しています。高校卒業後、家業であったトマト農家として就農しましたが、在学中からすでに精力的に働いていた児玉さん。「16歳で軽四の免許を取得してからは、朝の4時半に起きて市場まで出荷に向かい、それから登校することもしばしばでした。毎日忙しかったですが、市場では名前も覚えてもらえて、農業にやりがいを感じていました」と当時を振り返ります。

就農後、数年は土耕でトマトを栽培していましたが、地元の「M式水耕研究所」が新たに手掛け始めた水耕栽培施設と出会ったことで児玉さんに転機が訪れました。「地域の農家同士が交流の環境で定期的に行っていたほ場巡回で見学しました。その時はまだ実用は難しいと思いましたが、可能性を感じました。高校在学中に甚目寺の芽ネギ栽培を見学したことがあったのですが、限られた面積で高い収益をあげる農業を目の当たりにして、いつか自分もそのような農業がやりたいと考えていました。そんな経緯もあって、『もし良いトマトができるなら挑戦してみたい』と、水耕栽培がとても魅力的に映りました」と話す児玉さん。

その後、徐々に水耕栽培の技術が確立されたこともあり、21歳の時にはハウスを新設し、トマトとキュウリの水耕栽培を開始。しかし、昭和48年の第一次オイルショックに伴い、農業用の燃料油が入手困難になると、冬場は暖房による温度管理が必要な夏野菜のトマトやキュウリの施設栽培は壁に直面しました。「環境の変化に対応しなければと考え、寒さに強く周年栽培が可能で、かつ需要が安定しているミツバに品目を変更したのはその頃でした」と語る児玉さんは当時25歳。大きな決断でした。20年前には台風で温室のガラスが180枚ほど割れる被害も受けましたが、逆境にも負けることなく地道に農業を営み、今年で就農して52年目を迎えました。

「毎年気候が変化するので栽培管理も昨年通りのやり方では通用しません。生育状況も変わりますし、もし手を抜けば、ミツバは手を抜いたなりの顔になってしまいます。農業は何年やっても気は抜けませんし、先生にもなれないですね」と笑う児玉さん。

今後の目標について何うと、「たまに孫の顔を見たりしながら、健康で農業を続けられればと思っています。若いときは必死で働きましたが、今は利益を上げることよりも食べた方に喜んでもらいたいと思っています」と話します。

最後に消費者の方に向けて、「コロナ禍で皆さん大変なご苦労をされていることと思いますが、なんとか一緒に乗り越えたいです。こんな時だからこそ安全・安心にこだわって出荷していますので、ぜひ美味しく食べていただけたら嬉しいです」とメッセージをいただきました。

